

見合候所に、彌斷絶に極り申候。其故當年十一月十九日は、喜十郎殿一周忌に當り申候。去共其時分は、一家衆より法事など執行も可有之候へば、左様の妨にも可罷成と覺悟いたし取越候て、前月十九日本多殿寺、本郷天澤山麟祥寺へのしめ長袴小刀にて罷越、喜十郎殿位牌へ禮申入、それより家來をば用事に託し歸し申候。其身一人右の裝束のまゝ、喜十郎殿墓前へ參り、石壇より少前にて肩を脱、右の小刀を腹へ突通し候へば、袴腰に當りぬけかね申所に、其刀を引抜き再度胸へ突ぬき、墓前にうつぶしに罷成、劔に伏し相果候。近頃けなげなる事に存候。私門弟に恩地善三郎と申者有之候。右安右衛門と心安く語申候故、此度碑銘書申候由にて見せ申候故、少々直し遣申、其上にて安右衛門妹婿何某と申者、何とぞ私に筆を添くれ候はゞ、死者の面目にも罷成候はんなど、右善三郎を以て申越候。私も望所に候故申候は、碑銘は既に善三郎書候へば、拙者筆を添可申様も無之候。但石碑をほらせ申時分爲知候へ。石面に鹽谷誰が墓と申大字をば、乍惡筆拙者自身に石に書候て、ほらせ可申候由申遣候へば、ことの外悅申由に候。昔延陵季子

之墓の、嗚呼延陵季子の墓と聖人題し給ふによりて、近世湊川桶が碑を、水戸中納言殿より御建被成候時分、嗚呼忠臣楠子之墓と被題候由に候。拙者も此度嗚呼烈士鹽谷子之墓と題し申意得にて候所に、天澤寺の住僧合點不致、碑銘をさへ當時無例とて制し申候故事成不申候。他の寺へ改葬も仕度物に候へ共、死去の遺言にて主君の墓の側に墓を築き可申由に候故、改葬も難成不及是非事にて候。せめて碑銘はゆるし可申ものに候所に、前に石面に法名を除候て右の通に仕度旨申候故、いぢに罷成碑銘をも制し申と見え申候。是に付候ても異端の徒、義理の本心を失ひ申候故如此にて候。少でも義に感じ中心さへ有之候はゞ、碑銘は望候ても刻ませ可申物と存候。無是非事と存候。善三郎色々寺僧と僉議に及候へど、兎角合點不仕候。珍敷事申進候。

鳩巢

との御間不相善、御家中にも御笑止なる事に存候。陽廣公には御孝心深く、中々少の御疎略も無之、晝夜となく遠近となく、御孝志を被盡候得共、微妙公の御疑は日々深く御見え被成候。或年東海道より御歸國に付、品川の驛迄御見送に被成御座、御離れの節路傍に御つくばひ御暇乞被仰上候處、御言葉もかゝらず御駕の戸をひしと御たて、直に被成御座候。此時など只御涙にのみ咽び被成御座候。熟々御考被成候へば、横井内匠種々の讒言を巧出し、大姫君御入興の後御夫婦様被仰合、微妙公はやく御隠居有之御家督被成度、公儀へ御内々を以て御願被成、就其公儀向の首尾惡敷様に申上候體に粗相聞候。依之聊以て左様の御事無之趣を一々御書記、神文を御添被遊御封印被成、御上げ被遊度御調置被成、竹田市三郎並三人の者へ被仰合、能き御序に差上候様に御意に候所、三人の者御序相伺可指上と心掛候得共、はやく御推察被遊、筑前守何を頼るゝと被仰候。私共指上候ては、却て不可然奉存候旨申上候由。重て御工夫被遊、小林檢校へ潜に御頼被成度儀有之旨御意被遊、御一封御渡被成候所、此盲を人と思召御頼と御座候儀、生涯

の面目と奉存候旨御請仕候。扱或日御數寄屋御茶會有之、御客前に御自身灰を被遊候時分、御勝手口に檢校祇候いたし罷在候。市三郎、左門等も、皆段々御用有之立遣、誰も無之の儀考、御側近ねり寄、御袴のすそを取り、少申上度御事御座候。是を御覽被遊被下候様にとて、御一封を奉捧候所、沙汰の限の坊主めと御意被成、鐵の火箸を以て頭を幾つも御打被成候へども、少しもひるまず、御請取被遊候と申御一言を承候て申上度奉存候とて、少しも不動謹て罷在候へば、請取たといへと御意に付、難有奉存候旨御禮いたし退出。直に陽廣公御座の間へ罷出、其段前後の様子申上候處、檢校が手を御取被遊、御いたゞき被遊御落涙に被及候。其後は微妙公にも御聞届と相見え、御様子も直り、扱内匠も御前少し疎く罷成候。彌内匠が所爲と思召、御憤怒に不被堪、或時内匠を御居間へ被爲召、其方手前夫婦の儀に付、あらぬ事共讒訴仕候儀、言語道斷に思召候。申分候はゞ可申上候。御殺害も可被成候など御意有之候所、内匠一々私の御間柄あしく申上候儀紛無御座候よし、中々穩便ならず申上候に付、猶更御怒甚敷罷成、已に御手撃に可被遊と被成候